三代集 四

古今集　六十七首
後撰集　三十二首

辰

二

土岐文庫
文庫17
W43
4

和歌三絃集下之一

次古七中六十七首

一 神ひちて
二 こふね
三 こゝろのゆめつき
四 かなけ
五 ぬわれやいせね
六 ねよ乃山吹
七 うちんふき
八 神の春
九 やよやまて
十 とわらくて
十一 こころよくて
十二 わさしく
十三 かりの玉章
十四 いれおんせる
十五 ぬらふとかなわきて
十六 うらかれ

早稲田大学図書
羽澤文庫
松宇文庫
文庫 17 W43 4
昭和六十年二月一日 寄贈
010185195150

十七 うひ
十八 いろそめ
十九 雲のたえて
廿 ゆきのあゆき
廿一 ゆくゑよ敷く
廿二 うくうくさ
廿三 わつめ
廿四 おしぬめもんろ
廿五 わり敷く
廿六 かうろく
廿七 秘すゐの衣
廿八 くとなし
廿九 うちの橋姫
卅 いさよひ
卅一 弟と相敵
卅二 おかめさ
卅三 むろうんふさ
卅四 りけろふ
卅五 ゆふ付鳥
卅六 鴨のえ○うき

卅七 志らのたりき
卅八 いそそ
卅九 まくわ河
四十 むされのこらめ
四十一 野中の志み
四十二 一つのさとめき
四十三 のくくらゆ
四十四 さうぬ剣
四十五 志んそく
四十六 さらぬたぬきぬ
四十七 いろおのかなう
四十八 おのえ
四十九 ゆくろく
五十 志そのぬわさ
五十一 山田のそうれ
五十二 またまそて
五十三 やさし
五十四 やまとめくの
五十五 まら○ふく
五十六 すゑの松山

字七めさし　字八ひら○

字九祢うし山うし　字十みのもの

字十一もよとむ虫　字十二いれ○

字十三花かりと　字十四やりしま

字十五ひなのよれ　字十六さうしれ

字十七そでとり姫

一 袖ひちてむすひし水のこほれるを

春たつけふの風やとくらん

袖ひちては袖ひたすなり万葉には

漬とかきつてもひつるもおなし

ひなり

二 春日野のとふひの野もり出てみよ

今いくかありてわかなつみてん

とふ火とはむかし唐に軍せし時大なる

のろしとて山の上に○をあけていくさ

のおこりをしらせは次第に火をつきて一月

ゆくさきしひをたれてさも一日のう
ちよもつせられたるわ光とそふ光を
いふ燧帝の燭火といつられたるわ
日本記にもむかし<ruby>奈良<rt>なら</rt></ruby>のけいくさ
かうむとせしよりのこふ火とは
ゆかなるかくれぬそめてよの火とちる
人と悪をむかられわかまいはとれ
そふひ嫌といふなり

三 とちらのくさきあかねの年よ
かなつれくもらふくゐるうれ

とちらは万葉よきそとうきわとち
いかなるをいふてかなわぬ川きとは
同集よ家持後とうきわぬ川きれ
といふ初く

四 いさうみ玉の山のよまつあきん
それなれなけの花のけれは
なけとはなしとるよ初く日これなき
ものけやなきとしあるか
め 梅花まつくれる年ふめやりも
人のこころよわかれやはそれぬ

らるれは閏三月に伊勢かよめり所
かれかれてはせめて續つきたれは
うしといふ詞かなくへはそれぬ
うらむると字なくはぬの字も不
かなふましとのすもかなわ不為
ときてはせぬこともせむとよ
ひとつれはおかれていせねこはおかれ
やはせめておかうてん不為之文字
のやまひの脇も此詞といつて
み君物語なとにもこのことはかく

すなわち天神の御託宣にもこうむりて天
台山の御沙汰をかしこめくりかへしつゝ
のちをんぬめよろこひまんとしるに
三昧堂と名付て大法の行ひをなしおせ
ねしかるへきに名もこれやすかはしてつき
よかなせしてとゝくふ御いとしまして加茂
よいらひぬてまつる時法華三昧を
いとゝれるなかにもよめる詞に
たのしきなかにもかうし文部伺
うく

郭公もきこえぬ山ひとたに
かうしなくきくところもなきね
くふめるもこゝろつきたるゑとも
くにけり

六 蛙(かはづ)なく井手の山吹ちりにけり
あはまし物をられのさかりに
蛙とよめるは井手の山吹とは或
説に橘乃大臣諸兄井手寺をつくり
て金堂四面乃廻(くわい)廊(らう)のめぐりに山吹
をうゑて廊のうちよりさかりをみるとて
花ざかりをみせてあそびてこゝろを
つくしまゐらせけるに供(く)養(やう)の日
おもはずも讒(ざん)言(げん)をおひて身まかり
にけれはその花をうつしてころの年
もなくつぎよみたる年とよめるとぞ云
或人云橘大臣むの井の定(ちやう)営造て
山吹をうゑつぎみかぎりある墨にて
つくりきみわかるる年なからひ侍(つく)し
ゑみ諸兄とはひろ年とそ

七 ゑ月待山かくおほうらみをこ

今もなをかんこ鳥のかたこゑ
うちふるふきいうちふるかといふ心
なり羽かへハ羽とゝめくなりける
いなゝんとてハひとつとうち鳴
なり

八 五月待花たちはなのかをかけハ
むかしの人乃袖の香そする
是ハ伊勢物語云むかし人の妻なりけ
なるをまよつきてゐ中へくたりける
なかりしのちのおとこ宇佐のつかひ

にてくたりけるに安芸国（あきのくに）よむかしの
のまうけしけるところのつかひお
ちそうは酒なんとのませ其家の
あるしの女さかつきさゝせよとしき
つまのましくいひけれハ女あるし
さかつきをいたしけるにあさかなと
さうらひしにたちはなをとく
よめりしの女さきの家の妻なりけれ
あはれなれハむかしのふみかなく
かりひてかられぬなれハあま植とく

むしの人によそへてよみなり
九 やよやまて山ほとゝぎすことづてむ
われ世の中にすみわびぬとよ
やよやまてとはしばらくまてといふ
なかことばにてむかしは待なり言葉
なり
十 あしひきの山ほとゝぎすをりはへて
たれかまさるとねをのみぞなく
あしひきは万葉よりかはらぬし
をりはへてといふはうちはへてなり

うちへてといふおなへてとなり
十一 五月雨のそらもとゞろにほとゝぎす
なにをうしとかよたゞなくらん
空もとゞろには天もひゞきてなく
りふなり万葉集には動とかきて同
じなり夜たゞは夜もすがらなり
人のしるとよなくしえ
十二 蓮葉のにごりにしまぬ心もて
なにかは露を玉とあざむく
蓮葉は泥中よりいでゝも泥によごれぬなり

生死とハ泥に喩へ菩提とハ蓮に喩ふ菩提ハ
自性清浄にして生死にそまらず
蓮の泥にありてぬきことくわさしとハ
わさくらなるハ誰之字にあり
十三　秋風に初めて吹そむるなる
　尋ね章をとりてきこゆるを
蕤武か胡調にきこへられ召しに
かのおもむきをうけてなほ時にお
こそあらはすかたなりといふ
ことはりも左右なり

万なかのまれによ
　まへるよのむまくさ山とこそきこゆれ
うつのつくひハやかうしくなから
むまくさハ文の異名なり
古也　秋門にいたるおほせ名のなくなる
　とある風にうちわたらし名り
いかなるおほせられハ古今によさ侍りしめぐり
哉ハ秋風によむきとむ名てしあるハ或ハ
秋ちてくるとしわか或説に庭さき
とうへもあらハ草秋名萬葉花な

といふ文にそれはよろ川乃地也是名の
うらとおつくあうしめるにも
ことなる草なし順か和名には逢
ぬしきとハ即鶺鴒文鶺鴒なしといひて
註にハ日本記曰とつきとしへなるふ
うきうえ学よ稲負鳥とうちそて経
まハきくみいなおほせとめしうさ
て百首和歌集とて文よ出しなかれて
とるしこゝろえなれ伝聞ならしとめ
そこ之伝をきともいかて或人ハ云薩かわ

と或説ハ山鳥といふか山鳥ハ尾の
なかくあるなりよておほかくして
稲をおほせるよ似たれハいふなりと
いへともうけかたくもあるまきなん
といふよめりといへ
十ね　秋風に声をほにあけてくる舟ハ
あまのとわたるかりよそありける
唐櫓といふ事あからのなくふね
ハ櫓をとるよ似たれハ声よあせて稲
も許まもいふなかよあるとれ

しゑをわしつすよぬきてむなわらく
なくなわ何事も現形しろたまよ
出るといふなり
十六 秋風ようしふれとれハ足引の
山しぬとよのと府のなりらん
うしふれとハ抱あかりひなりてもるあうむん
なりわ万葉集よ頻しりきてなり川
むしとよめわとしのきハえしくなりわ
十七 秋いして飲うわすそこう花盛を
あらなう抱とりつへゆ守る

うめとハ初といふなりうめれとと
うめるといふわこれ初めの心なり
十八 いろくめよけりしひそ日ハあら
こころさせとハ人よこさせつ
いそくめとハうわろめなりてみえし
めなり
十九 夕暮ハ雲のはたてよ物そおもふ
あまつそらなる人をこふとて
これよ夜說あかつきハ雲をれうきころ
とふなりわ蛛(くも)と雲よよみしなして

又はそらなりといへとゝめてとは
蜘のゐハとうくこゝろゆめり掛なれ
いおりひよゝれへうるかわくすてよ
掛とおりふといふなかや字まなゝ蜘の
死ゐゆるともそてよめるゝ云の
さゝれのみものえたてよさらて此
うせこれ雲のいのちかわかれ
さうゝはハ蜘のゐかけても軍八吹ハ
かもれちてぬかうくのつゞかゝ雲の
うゐ川とそよもゝくゝらてそ雲乃

誹ゝもかたきのよ
さるかまハしともこゝろうれ
雲のたゝそても立よそかそね
艶はよめり
吹いてまれとへなそかめそ大船の
ゆきの宮ぬ留よ掛わりふころと
ゆきのゐゐこしい舟のかうこひうら
ひてゆうふかゝ猶縁しらまて
寛の字とゆきとこしむかなりうきて
うく掛ふむかなか万葉云

家のゆきのぬしのうはをぬかへ
つゐにおとろへもゆく事あり
花園のなり抱おりひさくめなり
つゐにおとろへもつゐにとめかう
こゝになかいしけるよゆきさきはせぬ
新古今なり
次一 ゆく河のなかれハたえすしてもとの水にあらす
おりふしへとおりふしなからそのわ
ひとつ教へてとしくれさ筆をとる
万治のよ

水の面に数うくうたかたはのち
いもにあつまるをひゆるかれ
これおなしむかしか泉をたもつれき
とよめりうきひとつ契の月のおき記
よい誓約とうきまり
次二 おちよぬきつ海渕によけひろくきも
にあさくめぐりひろくも抱と
落瀧津といふおちるぬさかなるゆく
うちのうみつよつかの流にてう
きえゆく泡(あわ)なり

廿三 郭公なくやさ月のあやめくさ
あやめもしらぬこひもするかな
あやめもしらぬといはんとてあやめ
草とつゞけるなりあやめもあやめと
これ文目もしらぬとは黒白もしらぬ
なり義盛哥
あし山のゆふつかれいそてかゝりむ
あやめもしらぬ宵かなはよ
武人なゆゑ義らへくしよる川
義しらぬ百騎よ弓矢ときとも

係はゆふかたになほ
廿四 津国のなにはのあはれもよしあし
しきこまちしんすまめや
めもしらぬ月もしらぬとは
詞なり
廿五 あさみどりすゑ我が心の貴女
とこてやまひ油なくよ
あれくもまくこもりまぞふう
こゝしなかくなくなしぬよふ
かな

第十六 志のゝめにおきてぬゆく
そのうさ晩しくなりてゆきさ
志のゝめはおつさかりかれお
うらなり

第十七 ひしくりはやきにさきの
ねずみの夜なよつなゆ絶ん
むし啼の夜ときくかねか
それはあさようかてすかり足
みなうるよ男ともつきへのさね穴
もうつるめかしよりは嵐ねね櫓

の夜はいつかみみ啼の根よく
とまらぬ夜ともよめゆめくと
ときはゆめはいつか

第十八 山鳥の尾のしだり尾今さるよ
ことなしかゝもゝ志るしあめや
ことなしかとは筆なきさ使よい
ひなもとく

第十九 さ山しるよ夜ゝ知なこしひや
これを結むしうちぬるし姫
さむしろといせくこしうさ嵯之

そのうへ橋姫といふ物語にあり
むかし妻を二人もちたる男ありけり
もとの女のつはりとして七色のめ
をねかひけれはかのをとこ海にゆき
て竜王にとられてうせにけるを
もとの女あくかれありきたつねて
ある海べなる磯によりやすみけるに
よとのつゝきのおとこよりきくに
夕かたのくとうたひて海より
きたるかさてそのあはき波を

いふてゆめきゝうせぬるの妻なく
くわかぬ今の女らの事とも
て姫のこゝろゆるしてはるゝと給
よみらの方とゝめひてきたれは
哀とりおもひかくたる書とゝふるよ
うれしくぬめくおもひてわとこに
うちかへりたれはまともしれも
宮たくのきぬたちようせう
たかくしひめとかくしとまかれ
神たる橋ちるとまいふ

哥　ゐやこしまれやゆかしきはいさしは
さまの格戸もさゝとねはかは
うちはさしくはやまとうたの
ならはさちふ月としは月代のわ
て出のやうねかとつふかる万葉
まいさうふ膝しそろはてをなふむ
なれば同名なれども心は別なり
其一般くよみのおもひてこひしく（それまされる行）
歌とし給ふかはゝやかゝん
うたくみて云ひしくみくゐふへ

歌にしとつくしく哉なかされはれ
のふむかしうらわさしれなりとて
しふくさなくしてかなゐ毎れなりとて
つくしくさうものにむかしさきん
しよみのかなる我方のおしこさと志さし
其方をしたる歌ふはふなりけれ
ともよて今の世の人は方とし歌
歌とはよめるなりへしみなるゝと
いふとも此つの作歌之の
筐にも方とし歌わかなかなかれ

袖もせきあへすもてなましかは
恋二　おもかねさのひくてよ粉ぬて姿わすれ
ろへてえそそゑぬのまさわかれ
大ぬさは様よりの時陰陽師のもち
ゐる幣よさしぬめる志てかわらさ
一果めれられとそのくひさせ
てかつる物かれは人のりことひよ
きとこもさまして もとられはひくてお
まくにかくわれにはもねてくよめり
恋三　むかへてなる本数なみよ物かれは

ゐえぬこみえられきもかし
こふ本あまこくよあるなそひろ
本乃おもかられてこえ
恋四　けろふみのそれはわぬみつき寒九
かへえれは袖そひちゐる
けろふていふあわさもなしにも
なくゐめしれひとえぬ物かれはそれ
かおつねみくしぬめくへひしてうきふ
くれをきわさみれしれそうそうり乃
ちいさらひそうかるまれ日のうらく

とおりに袖のうけなるのへうきて
かのめくなりし云怙す
うれしくて君はよろこふかけろふの
けしきうかれへいらひしき
まうふくれまかうるくなりかうへし
いらんとて気毎しれとも神功
しれよまつふらしし
かくおふさらの中にふ付為まかくそ
宝かゆきてとなくもとめ
あふさらいふ筆ハ神功皇后此附

ちかひしめなりける仲哀天皇(ちうあい)
の御弟二皇子に忍熊王といふ者ありて
しくさ神功皇后の継子なりけり神功
皇后武内宿祢(たけうちのすくね)に命(めい)じてうたせ給ふ
をなしてかの皇子をうちたまひし
給ふに皇子等をひきて退給ふを
武内宿祢精兵をとりて追ひくまの
ね坂にて紛合し王軍を破りて王
ところをあふ坂といひしとなん
委ハ日本記にくはしくあらはしけり

これ廿年さいうしき時四境乃条と
て帝のしるしの年なりの道のよ
末綿をつけて四乃関よいるめて
しらる条なりけめきらい夫一乃関
なりゆくことへ玄賓之
廿六喰の略のしるしさ百えうさ
うきあつめても拾なけく此外
略といふるい喰る○とうく年之
ろきく拙なれい百えうさと出る
廿七喰のこころもしらぬ百よのうさ

まんがうぬよめりとれなうるしとりく
武人云昔男の母といひつわるる
にれるめ世むさしのかくとまいそ
まうて拙といひかうるらなよ志ちと
かめて見らうくる百歳ねかめむ
時いまむしきうんといひかると
おもしく面風としのさそてろく
さうめつるかせかなかしちの
ろうよめるのうしてとうきなる
とくなれい九十九歳よかなわにかわ

明しは何年もいかゞし給はらく
つひてうつるよあやのよりひらせ
よろしれはありしなりよ宮りと
いかにうのよきく侍りしかるにと
此人いかに婦はいく給のかはこそ
人のこひしさ筆まゝに終
いくよ末もい寛しうさていく
ともあかゝ式ゝはしまいとゝもなりしく
りふくもあかゝ又いしく朧なりしく
云綱まもあかつ煙擺上

日ろしれと云ふもいかなくさゆゑ
秋のゆふくれよなれはなかめつわ
ひくしは蜉蝣のあさひかりわ拾遺云
一年よ二夜もぬ其なれは
いとなくろふれ花とうつされ
一年は一年なり
秋九なく雨ともかゝむとあぬ
あゆまくはかなきくつゆそれ
きくの河は三途川なりなくつゆ
うひとは海わりもへわなところ

なかに又三途河といふみつせ河とも
いへり菅原道正か地獄之絵とて
よめるに

みつせ河まぬかれ難もなき渡り
なかにかゝるもとぬきさるらん

如此よし給へ
罪むくれのこゝめやいふうちなきれ
砌のなきよけれおもひ出よかし
めくるゝ地獄のつらまさるめる
ひめとむらめんのこゝめしといふかたり

こゝのさしとき砌の具く人かたり
罪一いふへの此中の清ろめくれ給ひ
めとのむとしきよ人をくむ
しきあれ嫉戸のいかにも此よおのかみえ
ひとしいめてこゝろきてみなかたう
すゝしくよるこゝくかわらぬると
きく給へぬるめのめてこゝろあへ
とてきこえかたれてものませてはいて
わらへさしてのめかたるみてこと
命下南此とく奥儀坊よいきかわ

四十二 古乃しつのをたまきいやしきも
よきもさかりはありしものなり
賤のをたまきとは賤女のをうみ
てわつむのやうよまきぬりをとくさ
まろくしたる云 綣（ヲタマキ／ヘソ）
四十三 篠のをれふつむ雪も末おめく
りしくぬらゆく紙さわらも
おりしもおりしも云かわくも
とは斜と云字とよめりかのめかり
かの万葉には降ともよめりかくて

むかしの万葉に云の
こよひのや嘆くくも鳴くれの
おりしもきよにむぞまされわ
見いおりつきれぬをゆく也
四十四 おもひのまゝならぬ剣のみにいれ
いわしくこもく切きさ忘れ
不老剣人老て死葉いのかうさ
なかさゆくかわるもく切さしかれ
ともかりしきえ
四十五 ことくに京よ世ころ波の志ゆくも

ミちみかりき出津しまられ
和田原海なり或人云志川く志り
なかなきはやそてつきてもしく
よ志らしむまおりてゐてハ志
いくれハつかへいふよいうや
さこ香の志いくられしきわへ
波ハ女えとくり抱かれやしき
つまよこまかしきいつわ志はすく
とれ殺鳴しかきの文とり多れ後
よしきかよなくとくしくるとく

いふ追手舟のわとはさらわてと
そしらくとハ志ハ舟といつか志を
くいしさかなかへしもる志れ
なくといふこし
罕六ぬぬらぬそぬさし人も衣袖と
なれ山姫の袖さるらん
仙人の衣ハぬらぬなりの山姫これ
山神なり
罕七いりむ岩かの中よとまいくれ
世のうき事のきこえさらむ

是は譬喩経乃むかし天竺に四人
乃弟子道をもつて死せむ事とおそれ
一人は市のなかにまじりけれとも
死するはけるよいかにしてものかれの
かれぬる某の風よ志ぬるよし
事なかり
果は想にし事もわすれとけるの
ちらし而もとしひしわろ
是はむかし晋の王質といふ人傳
胡山といふ山にまよひて志わさ

ろうかなるに仙人圍碁うちゐるところよ
いたりかろくしてたゐて一番を
みるあひだにつくぬるそのうち
てあすてよろさかをのとは木をとうち
斧柄の事なりかれはおどろき
さく家ようつむしてするに肯の
うきろ頭と七かろうおひとは柏後
てられは栖もうせてしられ人
もなくなかりてそつくが家ともおか
えなくしてあわるくなると古人より

とひけれは四百年先こそ孫七代
乃祖は山にまよひてうせたるや
といひけれはあきれて
七世孫よそおもはれたる劉阮
謾入仙家雖為半日之客恐帰旧里
纔逢七世孫
罪なうきゝしことを何ともおもはしく夜
旅ゆたくぬてといふまじと
嬉しさとは神よつむといふ事あ
ゆたくくいゆとくとくしとあらん

年つくれ田とはいへるはかくきこと
まての田をと敷なくはかふ
郭公乃一名をしての田をといふ
なれは死出乃山なれは王雎は死出の山
よりきたる農をとりすゝめて
る時不就るとなくいふあれは
田をとよめるなれは皷なくとは鋼
なれはあるとのふかといふ事
あとしかる事たれるなるむらし皆也
までなたる郭公乃営の料也

て今宵の月乃かゝしにゐてまもらし
ことゝしてうくれにみれハ見れ
とゝめぬとてよひわくによりて
此名をえたるなりと云
子規なきつる夜見山まちて
くれてハぬきねくへ行らむ
相鴨丸ハ色ゐくて木の末よと鳴
のゆる月よ山の中よこしく
つらやきどゝハふかなわ
第十一 足引の山田の僧都とのこさん

家ハおもしてふられけりさゝ
そうほしハ田よゐてるおとろへし
の人形なり
第十二 そろつよとて三すれハうちわかもれ
あれいひえつとわふきさうされ
そつよハ此哥よしいふなわゐのゆへ
とさされハしいふなわゐきゐのあふ
き俳かわきさいきうき俳かわ文と
き俳うくき俳といふわ
第十三 俳とーて月みいてるよおひあらん

年のはおほん年もやまとこ
やうしきはくつくしさかしわさらし
こしかりみれやさしさむかわ
宇由まこりくれあれしれ山れ山人と
人もこりつ〇山ろつせよ
人もこつ〇とい風俗乃絹なわころ
つくなしいふむかわ山のつくとい神
あすりれ真辟鬘まてうしらとゆ
娘と山うつくれいふかわ山の〇よ
ものうきいかめうら　おほひとめうつく

たしのくれ山鬘たかうくいふかわ
睍の雲ともも山鬘離としふかわ寒
向のあれしくい大和國よあり山の
名かかり　好忠斉よ
寒向のあれしれ梅つまさくは
花ら雪とくこ向ろゆふして
られも此山なわむりつとい梅木の糸
ゆふしてとくれの山よ宗師の神の
やしろおりこれいゆふれかるのしらく
こ向うう花よまつふむかわちつゆふ

これ白和幣といひしが万葉よりいふ
なるべし
第十五まき○ふくきひの中山おびにせる
ほそ谷河のおとのさやけさ
まかね○ふくとはくろかねなり山にて
ほるを○をほりてわかしとれば○
やくといふなりきひの山のうら
かれ川めくられは夢によせて
ひつは備後備中のさかひにあるさ
やまさとは御製と出たり

第十三巻とてゆふしでをかけといひ
すゑの松山なみもこえなん
あだし心をわがもたばかの
いひしとさきは末松山なみこえる
といふ事はむかしあるかたに
此まつの松山とさしてその山によそ
のこゑん附そへてすへきちかはわ
きみかをあはくれのひとさかえん
たれはとまれもちかれはかへり
ひのゆふとなることあるといふ事

なかゝの山よまうしはなかゝのうら
といふなかゝの山よまうしはなかゝの
うみへよいわしてあれまぬの海乃
ゑもとよのさゆうはゆめ川なかゝの
末山のうへしかゝ西ろゑよとゆう
とあるへきもなきてしなれはあれ
なかゝの山とことん时らうもゑむ
といちうかうるなかり
其七こゆるきのいそたちならし磯菜つむ
めさしぬらすな沖よあれなみ

こゆるきは相模よありめさしとは海士
のいとけなきをいふ拘泥入るなと
おしていふ拘なり
其八甲斐がねをさやにも見しかけゝれなく
よこほりふせるさやの中山
さやの中山は宮部よりて小夜の中山なれ
はいふかもいふを小夜とかゝ
俗人或人日記并二説あり或云駿河国の風
くせあり何とも小夜なるれなく
むかしと云甲斐の風俗なり

さてもあらしといふはいまもさえ
第九 山おろしと称す 山より吹風を
いふなりやまおろしとて風らし
ふじのねに甲斐の白根之ねおろし山おろしとも
北越吹風と読たる人もありこは浜風と
いふもあれこそてやしとなり
第十 つきものこれものもよけれあれと
まさりけりよまさりけれなり
是は相模国足柄之彼国よりくる山と云山あり
他山より般若山といふものもは山ほどはなく

筆かなめ
第十一 あきのためいまとしむれなく
きことこそなけめ世をおもふかし
これは伊勢物語の前なかの秋なりの
海の藻やめかしれちいさき名ひの
やうようきぬらむしとふかなり
秋風のとくといふんとてあかるなり
第十二 のりこ海のなきこそいかなる秋の
いかにいわとこの月かなり
此海は出羽国にての名所よかれなり

それより都へ舟の橋をつくらく
のかうるはかりてのかりてかく
らぬはくむれども終にはのをれなく
くよめけ武人云はのころにての
かうとみのうしろをかれいなりの
ほとふかなりけりしこと出
六十三 ともの十れわさその申のもちを
ちまる人まよしやさらしむ
荒ちまとこもの荒かりてあとい
ちつきとふふかなり

六十四 和田系八十嶋うけてこき出ぬとく
人よりはきよわきのつわ舟
この舟は妙学にて隠岐へかうさ給
附よ舟よのかてこれ出なるよあか
和田系はよるいかは八十嶋におわくの
嶋かわ出羽国よやさ嶋といふ嶋
あるは剣の筆なり
六十五 おりひきやむなれ剣よおもらへて
わきの縄ねくいさかせんとれ
これも箭ゐて隠岐国よ被配流てよ

めかりかむゑなしといふ年百歳にいふ
うちやし式人気むなのとられとれ
恒山の四隅のゑむなんなかて斜し
らゑのられしかし年とよめるえ
はひぬのとられとらかゝ津よゑらくと
まとひおめくとつふかわ都よおめつ
らぬとゑむなひふぬるとつふくそし
あまの縄ゑぬしとらぬ年絹をそてよれ
てひきよすると云ふぬくしいふかわ
いきわとくおさるなかわのとむ

形係なきか
年六拾むかしさあらぬつきしかや
とりすて山よて月ととく
はかいむかし信濃國よ更級郡よ男
ありけりまた紀州よ女ハ死よけり
伯母のありけるおやのとくや
かひておりけりてきたる頼
よれとこハ毒とまゝふてかゝ年
来ねそひてありしのよめれむま
いとふきのおらてはに姥の花

ひろきのみつとおもはしくもて山
おこころのまゝにしめむさかれくて
わしこりしとおもほさせられいむら
しのも似とよろの事ハおかく
おいらのぬめよなかのうち此かハいかく
おもひて心えてぬのみつのあ是と
ころ給ふりて今まて志れぬらし
とおりひりていまりてつきの山よ
樵ぬまひおよんとやとめにせ給へ
とせめられいいぬくいりれて男さく

まとてしておりひて月のいとおかく
秋よ蛾とせんいさて世給へ此山のお
くよ患さ事の後とせぬてまう
むしいひられいまいてむしいふまさ
おもひて今山よ入くいてぬらまさ山
のうわくつくわくねこゝろよとさて
まけぬ風くしいつても暮もせて
きぬおとこ家よろつわさそておもひ
ろうからく志つれとも年はおやの
こくやかひつひりひておか

それがしくもりなくて此山のうへ
しも月はいつくし澄なくておもしろを
なかめつゝよりまさりいつもわすれがた
それはおほかたのうれしさは此所を
称して又むかしよりてよびけり
それよりしてさらしなの山と姨捨
山とはいふなりさらしなの月のごとく
なりて吟よみし続和歌に
六十七家せしところのつき清かなるその
くまものかゝらひのみてぞ見えもしも

それは衣通姫の所なり衣通姫ハ
雅渟毛二流の皇子の九女近江国坂田
郡忍坂大中姫の妹なり大中姫ハ允恭
天皇の后なり天皇即位七年冬新
室とひき給ふ后みづからまちてまひ
給ふとき天皇めでて褒しぬまゐらす
る事は姫をめでましむとの給ふ
まとられてなりにし艶衣と
とかたてつとこれなりけて時の人
衣通姫とかなりけり天皇は都をさし

こゝろかしこくてはつひとつうつくしく
めでたき皇后のむさとおもはれて七夜
まてくまいりもうけてめしよせ玉ふ
天皇大によろこひて則殿堂を
若宮のためにつくらせてよろこひてま
つり次第の若宮の成長して
こ給ふは衣通姫帝を慕ひて待かて
帝のこまやかなるとおもひしに
よめつかはし給ひし也とかた
さりしうらみて候ふさかりまゝいふ

かの天皇このうへとこしなへぬ心
御感情ありて詠し給ひつる御歌
さゝかに錦のひもとときさけて
あまたはいねすたゝ一夜のみ
さゝかにのといへるさくもの
錦のひもをとくへしとありし御歌
皇后これをきゝ給ひておほきにいかり
給ひてかの衣通姫のこと給ひ后を
うらみてなげくのみならす后
ねたみのこゝろしきりにやみ給ひぬ

天字別名と河内茅渟(ちぬ)よはうの
てくてをわさめとましぬまつの
かりしくは日本記よりこえぬの佐
吉の名しろは旧称おりしまとれ
こゝなもの称は此衣通姫なりしをぞ
称主国基八中文和哥のうら面
津鳥の呼称とてきりしまする此
衣通姫んむけくとめておもきる
ゆくよわよとなれ称つうしれんや
待くぬめ

和哥志ぬ集下之二

次後撰中三十二首

一ころのしろ衣
二ぬりさくく
三柳乃まゆ
四りとのうちもなく
五のゝせ
六ころのあや
七八くし
八ゑのかくかれ
九あしつて
十くはれちる
十一あしのる
十二くれたる
十三おもく
十四すくもくひ
十五あうさし
十六えよ

十七 えまなん
十九 いなせ
廿一 しつくさ
廿三 まさきかつら
廿五 うら浦の船
廿七 いもせ
廿九 いせよろ江
卅一 こもく

十八 わすみすてゝさ
廿 可よまうせてり
廿二 かきあれさひ
廿四 ゐぬきゐ海の松
廿六 わすのゝ衣
廿八 さちとみさひ
卅 さくらめ
卅二 大京やとか

一 山里ハ草よ葉の露も光まさらむ
そのしわざもぬらしてもさよ
そのし露ハこの代のさゝ事を
いふ萬代なり

二 山ちハいそいそ砂る砂乃
かのへのさゝておもてさむ
是ハ慥アの高砂よおもしと山の名を
高砂といふ砂積(いさごつもりて)て山となりしといふ
外文なりわかのつるハ山の尾上之

三 青柳の糸よくありつゝ田なれハ

春のくるにハ氷まさかなり
柳ハみとりにて人の心よ柳さわ
まかしいふまけていこゝろまかり
たへぬかなり
四 たなばたそ天河原ハあせなむ
たまのこゑのれくあくらく分ん
あせなくむしハあせなんなかの文字を
あくまんとてなくむしハいふなり
たのこつもかくしハかれあるま
和らくもなくらうちて只らくう

むしなり
め 秋くれハ鹿か世よ宮ぬとかなくて
らゑのおやハくれかきまん
鹿毛しハ鹿ちよこちあるよなり記
なきなおやしハ恥しるむ
なりおやしハあやまかなりさ
まゝてあそこのまれなれいまし紀
このもろこしとももらして
いつきゑのおやていふよつきて其
きくるともなれかきいさむしともく

もろこしのわざには只ひとつの
なきさだめ七夕のうたは
國の世よりあまた化名(かきな)のちかひく
かひろことはぬる一枚のこと
世の中には國をもちてしらぬ人な
しといふなり
其の世ようきぬる時はしらぬの
うちのこともおこねぬみちそ
此の世には其ほどもちてうつれ葉でも
のうきわれは列をしいふなり

六　ともすればむかしへかへしまきに鏡
ものうきことろそれしきさ
ますかゝみといふはますの鏡なり万葉
に十寸鏡とかきわたし真澄(ますみ)のかゝ
みとなり
七　うちはへしなきさのは八橋の
うみてよおりふし年ぬめしせし
八橋のかゝりしもつらく八橋まで
ゆてこゝにいひて杜若をかりつゝ折つゝ
おのつからいはくしむかし文伊勢物語

絵は参河国八橋といふところあり
いかなれはこゝを八はしといふ事
いはゝ水ゆく河のくもてなれは橋を八つ
わたせるよりていふなりのくもて
なりとかきつはたいとおもしろくさきたり
それをみてある人のいはくかきつはたといふ
五もしを句のかみにすゑて旅の心をよめといへは
八 わか身のうへのあはれをとひて
からころもきつゝなれにしつましあれは
唐よ函谷関といふところは鶏鳴

とこそて関の戸とかくるは孟嘗君
か隣国へにけてゆくに秦王ゆるさ
のせさりしかはかねて楽羅といふ人
よるのこゑを鶏のこゑをまねさせられい
きは鶏かなきて関の戸をあけ
るわらひにけてゆきたる
事とかや
九 難波潟みしかき芦のふしのまも
ひとつとえとよれてつゝる
なにはことは津国難波の事なり

このはゝ芸ノのおもくわかなわ
わつらは芸ノのなしにうもやうの
こゝくわうものへ
十 うけうふにうし汁まてられちる
ゆく気もきつぬこひよみとむ
けろふよこしうわとはかのうに
うしとよめるなわちれち白く
餘よへくうふ多ととれちゝぬるを
いふなわいつらゆくらんとえて
ねいゆく気もきつぬ半とよめる

みえ〇かしとこしわてくれちく
うふ多ともいふなわ
十一 わくのこ寒むむいわしれねの
まけてもへよおりんとれこふ
こけてりこいましてりいよ仏へ
まろもおなしむかわしれ根い
そうくまうけよまうわてさせるの
なれいうくよめるや
十二 それいうわやまうひすくわれ
二 ひつ山もこえとかわまう

くれはとあやとは綾の名なり又えまうし
呉国より二端とゝのへたてまつりけるそ
或書には或絹まゐる人の綾織の
名なり一人の名をくれはとり一人
の名をあやはとり一人は太神宮よ
りてまつり一人は摂田の里にまつる
か日本記よりわたしそのひとまつり
紀氏宗の初より人のおこせて御ゆゑ
よくれはそれといふあやと二端つ
まくはらとよよめしくわれ祀ら

あやの名にて侍るや郎女呉の字
をくれはとよむつきは呉衣と云
てくれはとよみ服の字をくれはと
とよみ人の姓にも服部上服と
てわかされはくれはとわとふみ
呉服といふ事にて呉国の名と
いふや或人云此国にわたる蠶人を
あやひめとめされし時四人の織女を
あてまつる二人をくれはとい
ひ一人をあやはとい一人をとい

きりくいひ一人とはあやしくわしく
いひて世中よそれはさりとわ
なりかやの事とはめぐみさう
わりてそのあやのなとはそれなりか
くもかはのなをつけていひ初
るかり此年月か記よりえさり
十三それとなくうらかたよふらん
思ひとしらひいふしものまん
見はみえれのこゝろまで人のとゝる
うへの世年なりかみえれよへ世界大悲

とは小年あまれやさ古あひぬるへとは
小忌といひきぬ人とは大忌といへて
をしかへぬる年よりきてよあか
十七 津国のかひにてきりしをそ
すくもくひの下よこゝろれ
しくもあくひとは海人はれさる
藻塩とりきあめくうかみえ
ぬりのまそれとこゝろはよあかな
よるかんしてとめしまでをかなん
こゝろすとそへぬかるん

すゑおやをとゐのじようしめよきハい
おなしうきしとさうさりせめ
うさしくいうわけすりにきりにこえし
とて某たしくとおわて おほくう
なりかおなしむなる人ハむかさ
しのうちにて鹿をいふなりけり
又ましい人陰従なるのりきしも取
のまれハなし於とうさひされハ
うのむよれつゝ或人云ゝすれ
人ハ某とめらてゝぬてあるとまま

わすさむしていふなりきうさしさきし
そもいつわきのたまよおわくそら
とかうちとふられとおりてきの
せきよおりれてさうむせとうちよ
まなしをさしてかていうわわ
すゑふるのられさしき年と云く
さうふりわのえまされわれ
えよくれ縁よしと云筆なわ綴筆も
きなるよたゐのふみの字ハ仮名よれ
よと云なり

秋ふけてひしぬるまもあかすよは
本紫にこそまされるわかれ
あくといふ事はけてもいてきぬ
し中はわきてそ縁あり
ゆるしなる本紫のはしくもい
秋とうわよりかはとらむなり
十七 ときなりのうつれかさにそそ
袖かわひつしといふなほし
そとなかうくのやうにそ海のお
めてよう〳〵そおひぬるめかたわ

しらしもなひそはれまとよあう
なり
九 夕霧は道もみえぬと思ひく
わたらしこそひまりせてそれの
老馬知道といふはむかし斎管
仲といふ人大雪にあひてちよ
まよひてまよはせてそれる
そなたちゆきさうなり
廿一 やさしきひ人なかめそんは衣
をよのかわしそゆめつもなかる

かされはひさしく菊されくにふるえ
菊をさむともいつはとさひしきは
わくらうちとらかは經元永二年
十月内大臣家の哥合に基俊判者
のよめりし

　たのまれはさ晩して霜とおきて
　菊さひらきて菊乃られ
はうれおのぬよめひゑめりかは
おひきてらとひつるや香时へく
いかにかくぬつねられとも基俊

されはうきよはわらはされけふも侍
らかなわ上ておさかわをもみえとも
してうらよ見のつきかれはくよ
めわ

十八　いせの海のあまのまてかたいとまなみ
なからへて身とうらやむ
海人いしかてしてハ塩合のくの
いさとをみつてもてきあつめく
るのけと焼かさて又れのいさ
ふとひりとのさらひまさちくしぬ

ありさわものまつりごとハいふなり
しかひの名よハそていとなめ
いつとまれさ年よ世てよめる
なり
十九いなせ天ひられねさら軸い
身と紀のも吾ぬ世なわるわ
かくのいひられてかんとひをる
きいせらよめらくなわせてら
諸するむなわ目か記よえる
万葉よハ諸といしくよめわいれ

ゆされされハ秘せらきめる式
人合ふのうのおされるひハらく
さひりてゆくなわ神さひかし云
むかわされハ例の後なわでこ
或二しつてよ志るされて牧のれ
ゆるも志つてとかしけらつる糸
志川つてくるハ織の女ら織くる
なれいされさる年よまれてくるあわ
或三うきわなく君れつれのなく空
正木のつれよまわもなそやめ

まさきのつれとハ和人のまさきの
かつらといふものを縄にして綫と
もなりまさきとしりもちゐて
つれきぬくといふなりおほひのつれと
いふもおほひの緒といふ絹なり緒ハ此
なりけり
又曰 並宝のかひまれ人ハおほらん
もしハ悪縁のなましおひつ
並のハひとしいひて人の喰物わ
かれと灰としてつわ性身とハ塵灰

かくしハ人のおりつるむかし悪縁とハ
流といふなり並ハ流よ生れハ悪よ
ろくへめるなり式続云ろひとハ這と
うきわおもふのある女のりしくゆく
とハ悪縁といふよりとハよりひと
こゑも悪這ハこのむかしろくすれえ
ひとりつくしよめるなり
又曰あまてらし何よりせんあれぬの
うし濁りをとおもひゆわつ
これハ雄略(ゆうりやく)天皇又二年よ册繕図余流

郡水江乃浦嶋の子といふもの九亀と
つりえたる女となりたりけるを
妻として蓬莱にいたりすみけるに
ふるさとをこひてかへりなんといひ
それは箱を封して是とうるまこ
らせてゆめ〳〵あくなといひふく
めたりしにゆくしきにあきてこれ
このよりひとこめたりける家
空にたちてくよのかはりたれは則
男おひくまつるよゝしとおりく

かひなし是をわきてたゝしき
こゝよりむかしなり淳和天皇二年に帰か
さとまつの秀居三百四十八年を
へぬるか
次六　右も集にてたかなうちしき
人さらへしわすのえるや
むかしあふみの國余呉の海に天女天
くたりあそひけるをあるをとこみておそ
こにてぬきをける天の羽衣をとりか
くしたれはえかへらすしてつまとして

ほそてうのおとこの妻となりけれは
是むかしの契なりけり或時おとこ
かくゆきける女かなしくしけれ
哀とそおもひてのちかはらてそなりけり
うちふふきこにいふハ古今よりいひつゝ
てくしあまのえうちもよれ夫人の
哀なりけり

歌七　むつましきいも背の山の中にさへ
　へたつるくものはれすもある哉

是ハ山の名なり妹山背山とて二つ
向ひ山なれはいもせといふなりとそうて
なかに女男をいはふとそいひおとして
妙とをいせうそいふなり文いりせい
夫婦といふ心古今よ
くひともも妹背そなへてお掩と
うつしまていつものみめかう
う思すけきをおもしもといふ心へ
よの妻といふことみえたるめの只ハ女男
いふ事なれハうつくしく人とハ万葉よれハ以
われ人とうつおとうつしかもとハ以意く

かきわりひよりめりきとてわれはら
くよめり
廿八うゑし時契りやしけん武隈の
松をふたゝひあひみつるかな
此松は宮内卿藤原元良といひける
人の舘乃まへにうへしめてうへぬる
松なりけるちのくれぬけり海といふ
もよあわきく此人二度その国守となりて
後のたひよめるうたなり武隈乃え
なりの松たいひ待るや　宇之か前か

武隈乃くれなゐよそての松ぬめよも
よろこしむわかわるかはさく
是ハ武隈のくれハしてよし出る
本よみしわか此松惟史に據てくれ
源満正より人るわかきき後よりせる
を梅乃道貞へわたまき後孝氏き
アて植つるわてきとしたのち
なくらせよくわかなきしけなきさ
とへ末の世まてゐをかたくとくめ
ぬらし　らく

歌九 いせまうる河いうミわかたうられ
そのまゝわれぬ身いうきぬかわ
いせとくれめ乃游とくいふかわめ乃字
とかいとくいふかわいうくいふも五十文
百姓家まよめ十まとうゑていふ気へと
よめわ
歌 今まむといひしかわと気うて
先川よきめへしきくさめふしと
見いむこのゑめのめてくさわかれぬ
ゑうとのまゝて中わゑめる高砂わ

きめへしとい消ぬへしかわさくさめ
といえうとめ刀自母の想名なわ日本
記よもえうわ
歌一 ともくそおもひきうれとかゆゑは
おなしうくほもくうさわかわ
ともくといいうりわとりふむなわ
人丸のよさうくむ時はまれもとも
とよめわ
歌二 大ゑやまとしおい山のかわうう
そまこうめうれあ舞のしけうん

これハ歳ごく大原にいまして大原
野社のうしろ小塩山乃ふもと給
なり